

「木も森もみる」ことのできる樹木医を目指して

埼玉県立自然の博物館 学芸員／樹木医 須田 大樹

「木を見て森を見ず」という諺があります。

細かい部分にばかり気をとられて、全体を見失ってしまう、といった意味の言葉です。

私はもともと、大学で生態学や植物社会学を学び、この諺とは反対に、「木を見ず森を見る」ような自然の見方を得意としてきました。樹木1本をじっくり観察するよりも、その木の生き様や生えている環境、ほかの生きものとの関係、また、その森の維持される仕組みなどに、より強い興味があったのです。

そんな中、異動先で天然記念物保護行政の仕事をすることになり、巨樹の診断や対応の相談などで、樹木医の先輩方と接する機会を多く得ました。的確な見立てと手際のよい処置に感嘆させられることがしばしばある一方で、生きもの相手、また刻々と進歩する学問の世界でもあり、その難しさを垣間見ることもありました。そんなことから、自分でも樹木に関する知識を身につけ、樹木1本1本をもっと理解できるようになりたいと思い、樹木医を目指すことにしました。

樹木医になったことで、それまでよりも多角的に、また仔細に樹木を観察することができるようになりました。仕事の面でも、天然記念物の所有者や地元の関係者に納得してもらえる、よりの確なアドバイスができるようになり、先輩樹木医の話も具体的に理解できるようになりました。

現在は博物館の現場に戻り、巨樹と接する機会は減りましたが、観察会で樹木の話をするときや、樹木に関する質問への対応、また研究などで「森をみる」うえでも、学んだことが役立っていると感じます。

これから樹木医を目指す人に、私から伝えたいことが

あります。樹木医としてまず求められるのは「木を診る」ことだと思いますが、ぜひ「木だけでなく森もみてほしい」ということです。

樹木の健康を本当に理解するためには、木そのものの観察に加え、大切な土壌の状態を含め、地下水、日照や風当たり、気象など、周辺環境を見極める必要があります。その場所がどのような地形のどのような位置にあるかや、もともとの植生、周辺で行われてきた土地利用履歴の把握なども、その木のおかれた状況を理解するうえで助けになります。

また、その樹種が本来どのような場所に生え、どのような生き方をする植物なのかを考えることも、適切な生育環境を考えるためには欠かせない視点です。

このために、樹木医のカリキュラムはさまざまな分野にまたがり、「森をみる」視点を学ぶ機会も用意されています。

樹木医になっても、まさに「木を見て森を見ず」にならないよう、総合的な自然科学の視点を培ってもらいたいと思います。私も以前のように「木を見ず森を見る」にとどまらないように、樹木1

本1本をしっかり観察することを含め、研鑽を続けていきたいです。

「木も森もみる」ことのできる樹木医が増えれば、樹木の診断や対応にあたって説得力が増すばかりでなく、樹木を通じた地域の自然の理解者・伝道者として、樹木医の社会的役割が一層高まることでしょう。このことが、私たちの目指す“自然環境を大切にする社会づくりへの貢献”(日本樹木医会ビジョン2012 最終章)にも、つながっていくのではないのでしょうか。



写真 自然科学の道に進んだ原点のひとつ、屋久島一人旅(高2)